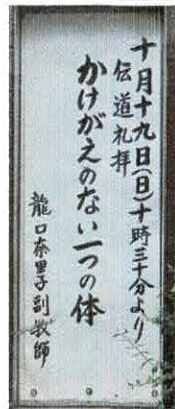


秋の伝道礼拝第2回(10月19日)

かけがえのない一つの体

龍口 奈里子



ゼカリヤ書3章10節

コリントの信徒への手紙I 12章14、26節

ゼカリヤ書3章10節「あなたたちは互いに呼びかけて、ぶどうといちじくの木陰に招き合う」

イスラエルの国はオリーブが有名ですが、ぶどうやイチジクも旧約聖書によく出てきます。平和や繁栄の象徴とされておりイスラエルの人々にとつては「イチジクの木の下で」「友と招き合う」という光景はもつとも幸せな時、喜びの情景を表しており、捕囚の民にとつて平和と繁栄を歌ったゼカリヤの希望の預言のことばです。

このようにゼカリヤ書3章にはイスラエルが悔い改めて再び神の民として新しく生きることが象徴的に記されています。悔い改めて生まれ変

わり、そして新しく生きる。これが今回の伝道礼拝のテーマです。

今日読みましたコリントの信徒への手紙を書いたパウロこそがそのことを実践し、悔い改めて新しく生き直した人物でした。彼はキリスト教徒を捕らえに行く途中で、復活した主イエスに出会い、目をふさがれるのでした。その後、弟子のアナニアによって目が開かれて、そこで回心し新しい人生を主と共に生き直した人でした。

パウロはユダヤ人の中ではエリートでした。その名声や知識で人々の人気を集めることも出来る人でしたが、キリストによって新しく生まれ変わったのでした。そして自分の評判とか人気ではなく、むしろ違う賜物や置かれているところで、キリスト者がそれぞれの主の働きをすることと、ますます伝道の広がりがあることを教会の人々に示しました。パウロにはパウロにしかできない務めがあり、ペトロにはペトロの賜物があつて、それぞれが互いに信頼し支え合つて、違った役割を担つてゆく使命があるということです。

そのことをパウロはコリントの信

徒への手紙12章で語っています。4節から6節では、主なる神によつて一人ひとり異なつた賜物が与えられ、その働きも異なるが、同じ主、同じ神、同じ霊によつて一つとされる。それがパウロの言う神の恵みです。神の恵みとは、風や霊のように自由で思いのままに吹くものなのです。だから、それは信じる人にも信じない人にも、すべての人に吹く自由な風です。だからこそ、私たちは主イエスとつながっていないければ、まるで糸の切れた風のように、どこかに行つてしまい、人々の評判や価値のある方へと流れていってしまうのです。

よくキリスト教の信仰を持つことを、回心すると言います。「回心」とは「心を回す」と書きますが、自己中心的な心を改めて、神に立ちかえることを言います。またパウロの回心に例えられるように、回心とは「180度の転換をする」とも表現されます。しかし、人は劇的に180度転換しても、やっぱり元の状態に戻つてしまうことがよくあります。悪いことをしてしまつて「これからもうしません。いい子になります」と反省しても、また同じ過ちをして

しまふ。ダイエットに成功しても、また元の体型に戻つてしまふのと同じ様です。信仰生活においても当てはまることがあると思います。

パウロの時代にも、キリストを信じる信仰を得て回心して、律法から自由になつたキリスト者たちがいました。律法主義を捨てて割礼を否定するわけですから、ユダヤ人にとつては、それはある意味、劇的な180度の転換となる「回心」であつたはずで、彼らはその時その分かれ目から、また新しい道「救いの道」を得ることができたのでした。

ところが、パウロの伝道した初代教会において、一緒に礼拝を守れなくなるほどの対立があつたのも事実です。根強く「キリストのみでは決して救われない。律法が必要だ。割礼はあるべきだ」と主張する人たちもいたからでした。

それは初代教会の中で大きな論争になつていました。せっかく信仰という新しい道を得たのに、もとの状態に引つ張られてしまふキリスト者たち(ユダヤ人キリスト者)がいました。パウロはそのような人々に対して、ある意味180度の転換の危

険性を言い続けた人です。自分自身が劇的な回心を経験しているからこそ、彼自身が「律法主義」の中心にいて律法に固執していたからこそエリート中のエリートというこの世の中心にいたからこそその注意喚起です。あなたたちは、あの時、自分自身をがんじがらめにしていた「律法主義」からせつかく自由を得て信仰をもったのに、また元の状態に戻ってしまうのかと。

今日の聖書の箇所は、そんなキリスト者に、再び信仰の原点に立ち返らせ、分かれ目に立つてキリストにつながる道を知らせるためにパウロがコリントの教会の人々に記した手紙なのです。一人一人霊の賜物が異なるように違いがある。違いがありつつ「共に歩む」。それは、自分の尺度で測るような限界のあるものではなくて、神の吹く風、自由な霊により頼むこと、そしてキリストの恵みにより頼むこと、主イエスとつながっていくことなのだと強調します。新しく生きる道の分かれ目に立つても行き先がわからない、そんな私たちをしつかりとつなぎとめて支えてくださるのは主イエスの恵みなのです。

パウロはキリストを一つの体としてたとえます。たとえを語るにはコリントの教会の問題が背景としてあります。人々は自分たちの教会での役割、賜物が他人よりすばらしいと思う人や、逆に他人の役割を役に立たないと批判する人もいて、教会の中で一緒に活動できずに、礼拝を守れなくなつて荒れていくのでした。これらの問題に対してパウロは12節

「体は一つでも、多くの部分から成り、体のすべての部分の数は多くても、体は一つである」と言います。一人ひとりの霊の賜物が異なるように一人一人違いがある。でもその違いがありつつ共に歩む。各々神から異なる「役割」「賜物」が与えられており、それは単なる違いではありません。体の中の目、耳、手、足、そのどの部分も必要であるのと同じで、どの人の賜物もまた「かけがえのない役割」を持つているのだと言います。だから、15節以下のように、だれかの賜物と比較して、自分の方が重要な役割を持っているとか、自分はつまらない役割しかしていないと決めつけてはいけなと言います。足の小指のように一見小さく見える器の働きにしか見えない存在だとしても、かけがえのない働きをしているのです。

パウロはさらに突っ込んで、最後に大変深いことを述べています。23節から25節。弱さもまた「かけがえのない」もの、無くてはならないものだと言っているのです。「かけがえがない」とは替わりがきかない、ということでしょう。「かけがえのない友人、家族」「かけがえのない命」私たちは一人ひとり神さまに「替わりがきかない」存在として創られました。体の部分のどれもが必要です。わたしたちの弱さも神さまからそれぞれに与えられている賜物であり、大切な役割を担っているのです。

荻窪教会のバザーでは、最初に讃美歌433番を歌います。作詞家シャーロット・エリオットは病弱なため、バザーの日に働くことができず、ベッドの上で祈るだけでした。表舞台で働けなくてもベッドで祈る人もまた、神さまから大切な「かけがえのない役割」を与えられています。

キリストの体なる教会は、自分や他人の弱さを真ん中に置いて、互いに支え合つて共に歩むことができるのです。そうすれば26節「一つの部分が苦しめば、すべての部分が共にすべての部分が共に喜ぶのです」。

教会はキリストの体です。そこに注ぎ込まれているのは、「律法」ではなく「キリストの愛」だとパウロは言います。聖霊によつて始まった教会にとつて、一人ひとりの賜物が生かされ、違いがありつつ、一人ひとりが一つに結び合わされるという大事な働きをなし、かけがえのない存在として、違いを認め合い、支え合う、そして共に歩むのだと言います。

私たちも自分の分かれ目に立つ時、十字架の主イエスにしっかりとつながれて、いつでも新しく生まれ直して、共に生きる道を示されたいと思います。体の一つひとつが異なるように、福音を伝える私たちの働きも、みな異なります。一人ひとりの役割を互いに認め合い、教会がますます外へと広がっていきますように主が先導し、いつも共に歩んでくださいますように祈りましょう。

(出席29名。文責・編集委員会。要約担当・菅野静恵)